

むすこ育て、わたし育て

初めてパートナーシップの講座に参加した時は息子をベビーカーや自転車の前方に乗せて連れて行った。お弁当を持たせ、保育に預けた。わたしの心配をよそに楽しく過ごしていたようでしゃぐ声が時折、講座室まで聞こえてきた。全 16 回の夜間の講座だった。幼稚園入園前の息子は帰り道で眠ってしまうこともあった。本当によくつきあってくれたと今更ながら感謝するばかりだ。そこへ通ったことで生まれたご縁はわたしが大切にしているものの一つなのだ。

その息子は小学生の時に東日本大震災を、高校生の時にはコロナ禍を体験した。ずいぶんと早い段階から「思い通りに進まない人生」を知ったわけだ。

だが、東日本大震災の一年後に被災地を訪れ、大きな被害を目の当たりにし、仮設住宅に暮らす人々と交流したことは「困っている人の助けになりたい」原体験となったように思う。

コロナ禍では登校も、友人と会うこともできなくなった。

数々の行事が、そして修学旅行も延期の末中止となった。後日、修学旅行に代わる行事として「VR 体験」が実施されたのだが、これはこれでとても面白く大いに盛り上がったと聞き、親の気持ちはほんの少し救われた。

その後少しずつ状況は良くなりはしたが部活動の試合の応援は禁止されたままだった。やむなく柵の外から静かに観戦し他校の先生からお叱りを受けたことは今となっては話のネタだ。

さて、学ぶ面白さを再認識した母とは対照的に息子は大学の勉強嫌いなのだが「大学へ進学する」と言いだした。私は「お金を捨てることにならない？」と何度も尋ねてしまった(誤解のないように書き添えるが息子のことは溺愛している)。

種明かしは簡単だ。部活動で取り組んできた「ソフトボールを続けたいから」進学したいのだと。高校時代に完全燃焼できなかったのだからその思いは理解できたが、覚悟を決めてもらうためにも学費は 4 年分しか出せないことを念押しし「最優先は勉強であること、必ず卒業すること、もしも中退するときは入学金を返すこと」を誓約させ受験することとなった。この取り組みには、わたしも大いに巻き込まれたが幸運なことに良い結果を得、進学することができた。

大学では少しの勉強と希望通り部活動に取り組み、指導者や先輩、友人にも恵まれ、目標のひとつであるインカレ出場を果たし、心も体も健康に毎日楽しく過ごしている。

「思い通りに進まない人生」は「思いに限りなく近い大学生活」にバージョンアップしている。

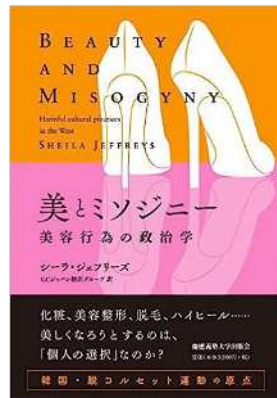
わたしは、といえば、ご縁から生まれた自主学習グループ活動と平和教育の授業に参加し、ゆるゆるとではあるが学びを重ねている。

(さとう)



『美とミソジニー 美容行為の政治学』

シーラ・ジェフリーズ著
慶應義塾大学出版会
(2022年)



韓国の脱コルセット運動の原点になった本。きつくて脆い婦人服、ハイヒール、脱毛、美容整形(女性器整形等含む)、そして化粧。すべて男性の様々なフェティシズムに女性の体を合わせるもので、権力構造での女性の従属性を再構築するものだ。巨大な資本も動いており、これらの有害な慣行は子どもにも影響を与えている。(最近では、加工アプリの顔に現実の自分を合わせ整形したい、など)

「個人的な選択」でそれらの女性に与えられた縛りを身にまとい、セクシーさを演出することでエンパワメントされる? そんなバカな! 女性を縛ることを好む男性の視線を浴びることで、力を削がれることはあっても、エンパワーされることはない。

化粧をしないと自信が持てない、脱毛しないと変な目で見られる、ハイヒールでないと職場で居づらくなる。それは自分の力を結果的に削ぎ続けることで、身体にも損傷を与えることだ。

本書に載っている、実際のウェブサイトでの、足の剃毛に疑問を持つ質問者への回答(おそらく男性のもの)を引用すると「〈中略〉ただし、「これは自分の体だ。私は自分のしたいようにする」という「高慢で尊大な」態度を取りたいなら、〈中略〉伴侶を見つけ維持する可能性を制限することになるだけだ。〈中略〉多くの男性はあなたに対してロマンティックな興味を失ってしまうだろう(申し訳ないけど、これが人生の真実だ)。」…高慢で尊大なのはどっちなのか。安っぽい人生の真実を押し付けられてはたまらない。

男性の権力に自分を差し出すことの虚しさ、屈辱、実害。さあ、脱コルセットしよう! (野田)

『憲法くん』

松元ヒロ 作
武田美穂 絵
講談社
(2016年)



この本は絵本の仲間です。ただ絵本ですが小学生ぐらいでないと難しいと思う内容です。でも著者は子ども達だけでなくみんなに「憲法」のことを知ってもらいたくて書いたことがよくわかります。

著者の松元ヒロさん、1952年鹿児島生まれのお笑い芸人です。『松元ヒロ氏のひとり芝居「憲法くん」をもとにしています。日本国憲法を人間に見立ててユーモラスに描き、その大切さを訴える同氏の舞台に共感した絵本作家武田美穂氏が絵を描き、書籍化されました。』と書いてあります。

「日本国憲法」と聞くと難しそうで、字がいっぱい読みたくないと思っていました。この本を読んでみて、そうなのかやはりきちんと読んで知らなくてはいけないことと感じました。前半は絵で憲法の話をして後半は松元さんの事が書かれ、最後には「日本国憲法」の10章103条が全文載っています。「日本国憲法」だけを読もうとしても読めないのに絵本を読んだ後には読めてしまいます…これは何だ?…と感じました。

『「日本国憲法」は私たち国民から権力を持つ人たちへの命令書。内閣総理大臣、国会議員、国家公務員など、税金でしごとをしている人たちに、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の3つの理念に貫かれた103の条文をピシッと守りなさいと、命令しています。』とあり、憲法は、書棚にしまっておくのではなく身近に感じ考えるものと考えが変わりました。是非みなさんも読んで松元ヒロさんのユニークな人生を知り、「憲法」に関心を持ってもらえればと思います。(あや)

『東京ヒゴロ』(1) (2) ビックコミックススペシャル

松本大洋 著 小学館 (2021年・22年)



漫画編集者として30年勤めた大手出版社をやめて、新しい漫画雑誌の立上げに奔走する主人公、塩澤と彼をめぐる漫画家やその家族、編集者たちの物語(連載中なので未完)。

塩澤が執筆を依頼しにいく往年の人気漫画家たちは年月を経て漫画を離れ、荒廃した団地の管理人、スーパーの主婦パートなどになっている。漫画を続けている者も、常に大衆性・商業性を求められる漫画という媒体ゆえに疲弊している。漫画家として描き続けることの過酷さが克明に描かれる(それぞれ現実にモデルがいるんじゃないかと思わせる)一方で、塩澤もいったんは漫画から離れようとして、あるきっかけで立ち戻る。

ここには、漫画にありがちなわかりやすい恋愛とか、競争に勝ち抜く主人公、とかいうものは出てこない。松本大洋の作品では恋愛相手がいることは「勝ち組」の目印ではなく一種の弱さの表れとして描かれ、競争を勝ち抜いて成功者となることよりもいったんは絶望の淵に沈んだ人が静かに再生することに主眼がおかれる。女性は等身大で、たとえば恋愛対象として常套的に描かれることはなく、作者はそれを意識的にやっていると感じる。地味だけど固有の生を生きる自分と他人をじっと観察して、漫画の絵とセリフに的確に表現することができる稀有の作者だと思う。

一コマ一コマの描き込みが緻密で、定規を使わずに仕上げた東京の風景、地平線まで続く家並みに驚嘆する。この絵を見るためだけでも、おすすめしたい。(前田)

『掃除婦のための手引き書 —ルシア・ベルリン作品集』

ルシア・ベルリン著
岸本佐和子訳
講談社文庫
(2022年)



著者はアラスカに生まれ、北米の鉱山町で育ち、南米チリの首都で10代を謳歌した。3度の結婚と離婚。様々な職業で4人の息子を育てながら、アルコール依存症に苦しむ。波乱万丈の一コマ一コマを切り取り、パンチのあるユーモアとカラッとした語り口で短編に仕上げた。全24編から、3編を紹介する。

表題作『掃除婦のための手引き書』は、掃除婦のコツをメモする女性。雇い主に「君、なんでそんな職業を選んだの?」と聞かれ「そうですね、たぶん罪悪感か怒りじゃないでしょうか」と棒読みで答える。実は恋人の死が許せないのだ。遺体の確認も拒否した。いまはただ黙々と働く。通勤バス、枯れ葉の歩道、不意によみがえる恋人の声、行き交う人、見慣れた風景。そして冬の朝「やっど泣く」。涙が心を潤す日まで、ただ待つこと、それがコツだろうか。

『苦しみの殿堂』は、母の思い出。裕福な旧家に生まれた母の生活は大恐慌で一変した。新天地で結婚生活をスタートさせ、2人の娘が生まれたが、孤独感から飲酒に走る。皮肉屋で毒舌家だった母。娘を傷つけ、勘当し、ジョークの効いた遺書を娘に送り付けて、自殺未遂を繰り返した。ユーモアのセンスは、この母から受け継いだと回想する。

『ママ』は、母が一番幸せだった時の話。一人アラスカに赴く母。港で出迎える彼。青い瞳に涙を浮かべる母は19歳の若さだ。映画のワンシーンのような情景を姉が語って聞かせ、妹は泣きながら母を許すと言う。若き日の母を娘たちが見たはずはない。これは病で余命少ない妹に聞かせる子守唄なのだ。

作品は主に1960~90年代に書かれた。著者の死後、再評価され2015年アメリカで短編集が出る。邦訳は2019年、文庫化は2022年。(Kナカノ)

第25回「ブックトーク&井戸端会議」

さいたま市女性学研究会（ゆい）主催

2023年9月17日(日) 14:00～16:00 パートナーシップさいたま 第3会議室 定員 24名

『今度生まれたら』内館牧子著(講談社文庫)

「人間に年齢は関係ない、なんてウソ。人生100年はキレイごと？70代では人生やり直せない？」この問いかけにあなたはどうか答えますか。そもそも、年をとってからそういうことを言いたくないから、今を懸命に生きている人たちもたくさんいるはず。人生の様々な節目で選択を迫られながら生きているのだから、後悔はあるものです。

だから…、だけど…、そこに女性だから、男性だからの生きにくさがあったとしたら…、それぞれの視点、考えを話し合ってみませんか。



2020年単行本発売では、『終わった人』『すぐ死ぬんだから』の著者が放つ最新「高齢者」小説！ 2023年発売の文庫本では「老後」小説！と宣伝しています。

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。参加費 200円。

事務局 <磯部> 電話;048-641-3765 Eメール;i.sachie@nifty.com

■パートナーシップさいたま耳寄り情報■

「まず大人が知ろう！自分らしく生きていくための性の知識 Vol.2 実践編」
～みる・きく #つながるBOOK～

(令和5年度さいたまマッチングファンド助成金一般助成事業)

主催：NPO法人にじの糸 協働：さいたま市男女共同参画推進センター

昨年度も大好評のうちに終了したオンデマンド配信性教育講座の第2弾を開催します。

今回は前回のアンケート結果をふまえて、「子どもたちにどう伝えるのか」という点で、より実践的な内容をお届けします。

専門家による性教育講座（全3回）をオンライン・オンデマンド配信でお届けします。

第1回 講師：高橋幸子さん（産婦人科医）

テーマ：月経編・妊娠編・性感染症編 他

申込締切：8月7日（月）、配信期間：8月10日（木）～23日（水）

第2回 講師：古堂達也さん（一般社団法人にじスタッフ）

テーマ：性の多様性編

申込締切：9月4日（月）、配信期間：9月7日（木）～20日（水）

第3回 講師：櫻井裕子さん（助産師）

テーマ：恋愛編、SEX編 他

申込締切：10月2日（月）、配信期間10月5日（木）～18日（水）

詳しくは講座HPから

講座HPのQRコードはこちら→

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/004/p097738.html>



「ゆい」2023年夏号 第7号（2023年7月1日発行）

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字、イラスト 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com



発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮センタープラザ3F

電話 048-642-8107 <https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>